

## フィールドワークを深めるもの

栗田和明

あらためて自分自身の仕事を振り返ると、約四〇年にわたってフィールドワークに従事してきたことに気づく。昨今は自分の来し方を文化人類学、アフリカ、フィールドワークの三点から説明することもある。この三点はどれも私にとっては大きな意味を持っているが、その中であえて比較すればフィールドワークが最重要であると思われる。他の二点に比べてより普遍性が高く、研究の場面だけでなく多様な場面で求められる能力や姿勢について教えてくれるからである。本稿では私が経験したフィールドワークをもとに、対象により深く迫るフィールドワークに必要なものについて考えたい。

フィールドワークを十全に実施しあらたな知見を得るためにはいくつかの条件が必要であろう。まず、当該の地で生活調査できるだけの良好な健康状態、言語能力、移動するための技量などは当然の要件であろう。長期の現地滞在とそれを生かした現地の人びとの信頼形成も欠かせない。

こうした条件が整った上で、フィールドワークを実り多いものにするためには、「より深いインタビュー」が必須である。深いインタビューは調査者と被調査者の相互作用のなかで実現される。調査者は「何

ワールドワークを深めるもの（栗田）

を調べるか」との意図は持っているが、それに端的に答えるかたちで被調査者から回答が与えられることは稀である。また、端的なかたちで与えられる回答は、意地悪く言えば、いわば想定内の回答であって、かならずしもインタビュウの醍醐味ではないかもしれない。

二〇一一年にイーライ・パリサーがフィルタバーバブルの存在を同名の本で指摘した。それによれば、私たちは外界に直接的に接触して情報を得ているのではなく、どの個人も独自のフィルタバーに囲まれている。これを（個人を取り囲んでいる）バブルと称する。このバブルはフィルタバーとして働き、外界の情報を濾過して個人に伝える。フィルタバーバブルを通してしか個人は外界と接触していないとされた。このフィルタバーは各人の性行に応じて次第に個人特有の仕様に形成され、各人が関心をしめずテーマのみを外界から濾しとる作用をしている。

インターネットで温泉旅行や格安パソコンを検索すれば、その後しばらくはブラウザを開く度に温泉旅館とパソコンの宣伝が送り込まれてくる。これはクッキーの技術を使用した効果的な宣伝方法としてひろく普及している。消費を促すための宣伝だけでなく、よりシリアスな問題についてもフィルタバーが働いて、一方的な情報だけしか各人には届かない。たとえば、日韓の関係である。日韓関係が緊張しているときに、徹底的に争うことを志向する者には、それを補強するような種々の情報のみが届けられている。また、日本国内に居住する朝鮮半島由来の人々に知己をもつ人や、朝鮮半島由来の各種の文化・文明の作法を大事にしている人も多数いるが、彼らには抗争志向とは異なった視角からの日韓関係の情報だけが届けられている。お互いにフィルタバーで濾しとられた情報のみしかないので、それぞれの立場は逆方向に強化され、分断は深まる一方である。

同様にトランプ大統領の施策への支持・不支持、原子力発電の是非、移民の受け入れの可否、国家予算の配分先の選定、などあらゆる課題についてフィルターバブルの存在が立場の分断を広げている。

フィルターバブルを打ち破って、より直接的に対象に近づく手段は十分な対話と参与である。対話 dialogue の接頭辞 dia は交差することを示している。たとえば、円や球の直径 diameter に示されているように、はじからはしまでの一番離れているところの交差を意味している。円や球の短い弧の両端を結んだ関係は直径にならないのである。

Dialogue は異なった意見を交差させることから始まる。理想的には対話は相互にとってあたらしい発見をもたらすものである。フィールドワークにあてはめれば、調査者だけが情報を得て知見を増やすのではない。いわゆる被調査者もあたらしい知見を得る。じっさい、調査地を訪問した文化人類学者が質問攻めになったりすることは珍しくない。こちらが尋ねたいことを明確にするために、調査者がすすんで日本の事例を詳細に説明したりすることもある。

アフリカでの結婚では婚資のやり取りが見られることが一般的である。婚資支払いのタイミング、多寡、支払いの過程などに当該社会の特徴が現れるので、婚資にまつわる事象は大切な調査項目である。一夫多妻の世帯で、それぞれの妻について、どんな婚資の支払い方をしたのかを尋ねる。当然、被調査者も「では、日本ではどうなっているのか」と尋ねてくるので、日本の例、私の場合を詳細に説明するようなこともある。文化人類学者が被調査者となることもあるのだ。調査者と被調査者が相互に対話しながら情報を確認することはフィールドワークをすすめる上で必須であろう。こうした意味で、あらか

フィールドワークを深めるもの（栗田）

じめ質問項目もその回答方法も定まっているアンケートを用いての調査には大きな限界を感じる。

たとえば、定期的の実施されるマスコミ各社の世論調査はいかがだろうか。政権や総理大臣への支持・不支持を尋ねたあとその理由についてアンケートをすすめていく。支持・不支持の理由として、政策の良否、支持政党との関係、実行力、他党との比較などから選択を求められる。私はじつは、政治家の「声の魅力」「起立時の姿勢」「顔と体全体の印象」「服装のセンス」などにも注目している。じっさいの投票行動にはこんな要素もおおいに影響しているはずなのにアンケートでは無視されている。人間行動の大切な側面を見逃しているのではないだろうか。

フィルターバブルに抗する対話と深いインタビューは、同根のものである。また、深いインタビューは、口頭でのやりとりに終わらず、調査者／被調査者が一緒に同じ作業をする「参与」や、あるいはたんに同じ場所でおなじ様に時間を過ごしているだけの「共生」とも通じていく（この「共生」は一緒に生活しているとの意味で、一般的な使い方の共生とは異なっている）。

参与とは、たとえば農作業に参加する、工芸物の製作過程の一端に携わる、一緒に旅してマーケットの各所で掘り出し物を探す、などである。農作業が大変なことは口頭で伝えられるかもしれない。しかし、実際に体のどの部分に力がかかり、痛くなるのか、それが時間経過とともにどう蓄積されたり慣れていくのか、などについては参加して一緒に作業する者だけが得る情報であろう。同様なことは工芸品の制作でも、交易人の活動においてもあてはまる。

既述した深いインタビューや参与を十全に実施するためには、長期間かけて、複数の機会におこなうことが望ましい。長期間、複数の機会に実施する継続性に注目して共生という要素を取り出している。

共生は、深いインタビューや参与と重複し、補い合うことも多い。

私がタンザニアの調査地の村に住み込んで、近所に脚が悪い老男性が暮らしているのに気づいた。家族はいないのか、一人暮らしで、農作業も水くみも不自由な脚でおこなっていた。なんとなく気にしていたが、やがて彼の脚のけがの原因もわかった。彼は悪い意味での呪術を村人にかけてと人々に思われた。ある晩、それに対応すべく村の青年・壮年多数が彼の家に火をつけ、石を投げて脚をくじいてしまった。その後、行政が関与したり、裁判があったりしたが、結局この老人は私の調査村に住み続け、襲った人々もその村に住んでいる。こうした顛末が分かるのは、深いインタビューと参与の成果とも言えるが、長時間村人と生活を共にした共生に寄る、と説明する方がしっくりする。

文化人類学の調査で、該当の人々の行動規範を抽出するのは大きな目標である。こうあるべきである、との理想像を描き出すのである。もう一方ではその規範を目指しつつも実際の事情で変更がおこれば、その変更された姿を記述することも重要である。共生は、どちらかと言えば実際の姿の記述を蓄積していくのに有効な手段だろう。

文化人類学の調査地の範囲は広がっている。ロンドン・ニューヨークのような都市であれ、高速通信で支えられてリモート・オフィスワークが実施されているリゾート地であれ、特定の人々に関心を向けてフィールドワークはされている。それでも、文化人類学者の多くのフィールドワーク場所は、いわゆる未開社会、つまり科学技術文明の側面からは遅れている処が多い。なぜ、こうした土地でフィールドワークを実施するのであろうか。調査者本人が住んでいる社会とは異なる社会に接したとき、当然とし

フィールドワークを深めるもの（栗田）

ていたことを再考する機会が得られるからである。そして差が多いほど、より容易に気づきのきっかけが得られるのかもしれない。

文化人類学者が描く世界像の一端としてインドラモウ（因陀羅網）を紹介したい。インドラモウとは仏教で説く帝釈天が住む宮殿の名前である。この宮殿は網によってつくられ、その網の目には種々の宝石が結びつけられているという。すなわち、ダイヤモンド、ルビー、金・銀、サンゴ、メノウ、真珠などである。結ばれているのはかならずしもすべてが高価なダイヤモンドではない。はつきりした色合いであるが安価なガラス片もあろう。くすんだ雲母もあるかもしれない。酸化した金属を含む鈍い赤色をした石もあろう。これらがお互いに反射し反映しあうことで全体としてインドラモウは美しく輝いている。

これは構成要素の多様性が全体の価値を高めることを示した美しい比喻であり、私はおおいに気に入っている。フィルターバブルに風穴を開け、意見の相違が大きくても対話を実施し、場合によっては作業にも参与する。こうした多様性、異質性に親しんで認識を深めていく作業がフィールドワークであるとするならば、それはたんに文化人類学の一方論にとどまらない。日々異質なものと接触し続ける私たちにとって、フィールドワークから学ぶ姿勢は必須なものになる。今後も自身のフィールドワークを各場面で深め、周囲にもその姿勢の重要性を示していきたい。

（本学名誉教授）